被援助感情と対人的志向性および心理的 well-being との関連

○鷲巢奈保子 内藤俊史

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

キーワード: 感謝、心理的負債感、心理的 well-being

Influence of gratitude, indebtedness, and sumanai on interpersonal orientation and psychological well-being

Naoko Washizu, Takashi Naito

(¹Graduate School of Human Developmental Sciences, Ochanomizu Univ.)

Key Words: gratitude, indebtedness, psychological well-being

目 的

他者から援助をうけたときに生じる肯定的感情として、感謝が挙げられる。また、他者から援助を受けると、援助者に対する返報義務感である心理的負債感 (Greenberg, 1980) や、援助者に迷惑をかけて申し訳ない、すまないという感情 (以下すまない感情) のように精神的苦痛を伴う感情もしばしば生じる。先行研究において、感謝は社会的相互作用を増加させ、well-being と正の関連をもつことが指摘されているが (Wood, Froh, & Geraghty, 2010)、負債感や社会的相互作用を減少させ、well-being を損なう可能性が示唆されている (Watkins, Scheer, Ovnicek, & Kolts, 2006)。

一方で、日本社会に影響を与えてきた宗教である仏教では、人は世界が相互依存関係のなかで成立しており、自らが多くの他者から恩恵を受けていることを知るべきであると定められている。このように借りがあることの自覚に道徳的価値をおく文化のもとでは、負債感やすまない感情は他者との関わりを減らすのではなく、むしろ増やす可能性が考えられる。負債感やすまない感情を強く感じる人ほど、積極的に他者と関わっていくのではないだろうか。また、日本で生まれた心理療法である内観療法のプロセスでは、他者からしていただいたことと自分がしてあげたことを思い出すという作業をとおして、強い負債感やすまない感情から他者一般ひいては社会に対する肯定的感情が生まれるとされる (村瀬, 1986)。内観療法のプロセスは、負債感やすまない感情が well-being に至る最初のリソースとなる可能性を示唆している。

以上のことから、日本では負債感やすまない感情が感謝と同様に社会的相互作用および well-being と正の関連をもつ可能性が考えられる。本研究は、感謝・負債感・すまない感情という3つの被援助感情と、対人的志向性および心理的 well-being との関連について、以下の仮説を検討することを目的とする。仮説1: 負債感とすまない感情は、感謝と同様に対人的志向性と正の関連をもつ。仮説2: 負債感とすまない感情は、感謝と同様に心理的 well-being と正の関連をもつ。

方 法

調査協力者 東京都内の女子大学生 179 名 (平均年齢 19.59 歳、SD = 2.83) であった。

質問紙の構成 以下の7つの尺度に回答を求めた。①感謝心尺度 Gratitude Questionnaire - 6 (GQ-6; McCullough, Emmons, Tsang, 2002) 6 項目、7 件法。②心理健康尺度簡略様式 Psychological Well-Being (PWB; Ryff & Keys, 1995) 18 項目、6 件法。③心理的負債感尺度 (相川、吉森, 1995) 18 項目、6 件法。④対人的志向性尺度 Interpersonal Orientation Scale 5th Version (IOS; 斎藤、中村, 1987) 18 項目から、下位尺度「人間関係志向性」と「対人的関心・反応性」の重複項目である1項目を除いた17項目、5 件法。⑤すまない尺度: GQ-6 を基に作成した6項目、7 件法。⑥ポジティブリフレーミング尺度: Lambert, Graham, Fincham & Stillman (2009) 4 項目から日本人に

は理解しにくいと思われる1項目を除き、3項目を追加して作成した6項目、5 件法。すまない尺度について GQ-6 との弁別性確認のため使用した。すまない尺度とは負の、GQ-6 とは正の相関が予測される。⑦社会的望ましき尺度 (北村、鈴木, 1986) 33 項目から、本研究の調査協力者に選挙権をもたない未成年が多く含まれることから、選挙に関する1項目を除いた32項目、2 件法。

結 果 と 考 察

分析は社会的望ましきの影響を統制して行った。表1は各変数間の相関係数を、図1はPWBを従属変数とした重回帰分析の結果を示している。感謝と同様に、負債感とすまない感情はIOSと有意な正の偏相関がみられ、仮説1は支持された。一方、負債感からPWBへの影響は有意でなく、すまない感情からPWBへは有意な負の影響がみられた。したがって、仮説2は支持されなかった。負債感やすまない感情と心理的 well-being との関連については、他の変数の影響も含め、そのプロセスを今後さらに詳細に検討する必要がある。

表1. 各変数間の相関係数 (対角線の上半分は偏相関係数)

	1	2	3	4	5	6
1. 感謝		.26***	.10	.28***	.43***	.30***
2. 負債感	.28***		.25**	.34***	.08	-.03
3. すまない	.02	.21**		.15*	-.14	-.19**
4. IOS	.28***	.35***	.14		.25***	.15*
5. PWB	.49***	.12	-.20**	.24**		.57***
6. ポジティブリフレーミング	.38***	.02	-.26**	.15*	.62***	
7. 社会的望ましき	.31***	.13	-.23**	.04	.34***	.37***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

図1. 重回帰分析の結果 (矢印は標準偏回帰係数、双方向矢印は偏相関係数)